

認識の記号論的分析

大窪 徳行

序

C. モリスの記号論（構文論，意味論，語用論）⁽¹⁾ と G. フレーゲの論理主義（意味の外延，内包）⁽²⁾ さらに，A. タルスキー（真理の定義）⁽³⁾ の成果をふまえて，現代記号論理学—構文論，意味論—の基礎を築いたのは R. カルナップ⁽⁴⁾ である．一方，語用論は論理学として基礎付けられなかったが，永井成男によって初めて論理学として提示された．

モリスの記号論を受け継いできたカルナップであるが，語用論についてはながらく記述的語用論しか認めなかった．しかし，純粹語用論を認めた後も“意味論的解釈”と“語用論的解釈”の区別はできなかった．この語用論的解釈を明示的に与え，論理学の基礎を築いた永井成男（1922～2005）の“語用論の論理学”は画期的である．^{(5) (6)}

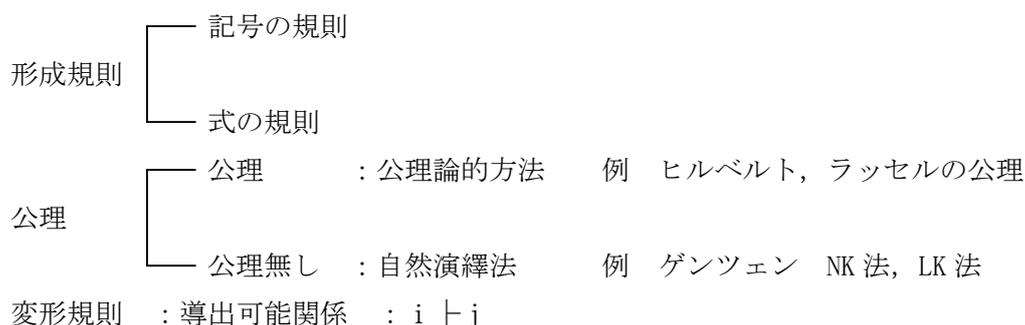
今日においても，意味基準を問題にした論理実証主義以来，意味論と語用論の区別もない，混乱した論争がなされている．これら2つの領域は重要であるが，とりわけ，語用論は（記号の）解釈者と記号との表現関係を扱うゆえに，言語解釈者として認識論的問題に深く関わらざるをえない．

認識論に関しては存在論とともに伝統哲学の主題として多くの論争がなされてきたが，認識論はそれに含まれる存在論的（形而上的）側面を除いて，記号論として扱われなければならない．この立場からカルナップは認識論を言語選択の問題としてとらえ，その基準として「寛容の原理」を提唱した．

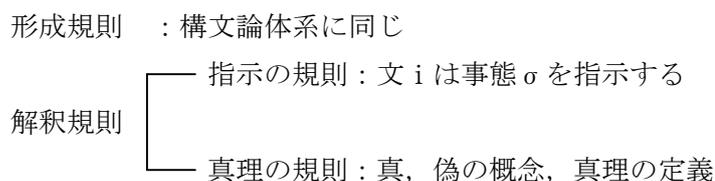
1. 永井の「語用論の論理学」

本論で必要な範囲にかぎり，永井の考えを筆者の理解に基づき，解釈を補いながら述べる．形式論理学を規則の観点から対比して述べてみよう．

I 構文論の論理学体系



II 意味論の論理学体系



推論 : 論理的含意関係: $i \rightarrow j$ 例 セマンテイク・タブロー

III 語用論の論理学体系

形成規則: 構文論体系の規則に同じ

解釈規則

- 指示の規則: 文 i は事態 σ を指向する
- 検証の規則: 検証, 反証の概念, 検証の定義

既知の意味論の論理学と対比しながら語用論の論理学を述べよう.

意味論的解釈規則の指示概念に対応するのが, 語用論の指向概念であり, これらはそれぞれの論理の基礎概念である.

我々が通常“記号 x はあるもの y を意味する”というとき, これは次の3つの場合に分けられる.

記号 x はあるもの y を意味する

- 記号 x はあるもの y を表現する(表現関係)
- 記号 x はあるもの y を指向する(指向関係)
- 記号 x はあるもの y を指示する(指示関係)

表現関係は解釈者に依存する主観的な表現内容であり, 指示関係は解釈者と独立である客観的な指示対象である. これに対して, 指向関係は, 指示関係と表現関係が互いに依存する関係として, それゆえに, それは一面で客観的であり, 他面では主観的な指向対象として, 永井が新しく定義した概念である. この概念の意味は, 次に述べる, 意味論の基礎概念である“真, 偽”, に対応する, 語用論の基礎概念である“検証, 反証”の定義によって明示される.

「検証, 反証の定義」

文 i は検証されている $=_{DF}$ i は真であると認識されている.

文 i は反証されている $=_{DF}$ i は偽であると認識されている.

この定義の左辺の被定義項“検証”に対して, 右辺の定義項の部分“真である”は, 指示的關係の客観的側面を含み, 他の部分“認識している”は, 解釈者に依存する主観的側面を含んでいる. また, “真であると認識されている”は, “真であり, かつ, それが認識されている”と言う意味ではなく, “真であると思われている”という意味に近い, と永井は述べている. さらに, 意味論の“真”の定義

「真の定義」

文 i は (言語 L 上で) 真である $=_{DF}$ 文 i は (L 上で) 事態 σ を指示し, しかも σ である.

に対応して, 語用論の“検証”を解釈規則によって導入する.

「検証の定義」

文 i は (言語 L 上で) 検証されている $=_{DF}$ 文 i は事態 σ を指向し, しかも σ であると認識されている.

以下, これに基づいて, 論理記号の検証条件も語用論的解釈規則として与えられる.

2. 伝統哲学の認識論と分析哲学の認識論

認識論は存在論とともに古くから哲学史上論争されてきた二大主題の1つである。ここでは、伝統哲学の3つの主要な認識論を見てみよう。

(1) 主観的観念論

“物質”は“物”に還元され、物は“感覚与件”に還元される。この現象的世界は感覚与件の世界であり、そして、感覚与件は認識主観の意識内容である。

(2) 素朴唯物論

物の世界は認識主観から独立な存在であり、それが真の姿である。

(3) 反省的實在論

物質は認識主観から独立した存在であり、それが真の姿である。

これらの伝統的認識論は、いずれも世界の真の姿、存在を認識する唯一の正しい方法であると主張する。すなわち、これらにおいては、存在論を含む世界観の主張である“真の姿”という意味論の主張と、“存在を認識する”という語用論の主張の区別ができなかった。

これに対して、分析哲学の認識論は、存在概念や存在文の意味分析は“メタ存在論”、“分析的存在論”(永井の用語)として成立すると考えるが、それらを認識論からは排除する。⁽⁷⁾

感覚与件 (sence-date) の世界は“感覚与件言語”という言語的枠組による認識方法を通じた“1つの世界像”である。同様に、“物言語”、“物理言語”の言語的枠組による認識方法を通じた、それぞれの世界像が可能である。このことは“意味論的真理概念は言語に対して相対的である”からの帰結である。伝統的認識論の諸説は、存在論を含む世界観であり、両立不可能で排他的である。

初期の論理実証主義は、現象的世界のすべてを感覚的言語で記述可能とし、物言語も物理言語も感覚言語に還元可能と考えたが、そのような試みは破綻した。

それに対して、カルナップは科学的世界像を得るための方法として、物言語を含む広義の物理言語によって世界を記述する“方法的唯物論”をとったが、もちろんこれも選択の一つにすぎない。

世界を記述するには言語が必要であるのは言うまでもないが、伝統的認識論の世界像は、その言語的選択による1つの世界像にすぎなく、両立可能である。また、選択した言語内の認識文については真・偽を問うことはできるが、言語外の主張は形而上的問題として排除される。言語選択の問題は実践的選択の問題である。同様に、ノミナリズム、リアリズムの主張も、存在論的部分を除いて考えるならば、言語の枠組として外延主義の言語で語るか、内包主義の言語で語るか、どちらが適切であるかという実践的選択の問題である。言語内的存在問題は真偽を問うことが可能である理論的問題である。これに対して、言語外的存在問題は真偽を問うことができない形而上的問題である。これがカルナップの“寛容の原理”である。

3. 認識（論）と語用論

認識のためには言語的枠組が必要である。この言語的枠組は理論的には複数あるが、実践的には規制される。科学的世界把握としての“経験主義の原理”という意味基準によって、形而上的存在論を経験的意味を欠く無意味な疑似言明として拒否するのが、カルナップの“寛容の原理”の主張である。これに対し、永井は意味基準を意味論的解釈による“意味論的意味基準”と、語用論的解釈による“語用論的意味基準”，さらに、狭義の“経験主義的意味基準”に区別し、それらを厳密に定義し、カルナップの寛容の原理が認識論的意味基準であることを明らかにした。(5)

[意味論的意味基準]

DF1 文 i は (意味論的に) 有意味である $=_{DF} i$ は内包 (真理条件) を持つ

DF2 文 i は (意味論的に) 有意味である $=_{DF} i$ は真偽可能性を持つ

[語用論的意味基準]

DF1 文 i は (語用論的に) 有意味である $=_{DF} i$ は内包 (検証条件) を持つ

DF2 文 i は (語用論的に) 有意味である $=_{DF} i$ は検証可能性を持つ

DF1 と DF2 は同じことの異なった定式化である。意味論の内包である真理条件・真偽可能性に対し、語用論の内包である検証条件は真・偽を認識する条件・可能性である。

[経験主義的意味基準]

DF1 総合的文 i は (経験主義的に) 有意味である $=_{DF} i$ は内包 (経験的検証条件) を持つ

DF2 総合的文 i は (経験主義的に) 有意味である $=_{DF} i$ は経験的検証可能性を持つ

ここで、筆者の関心は、(創造的) 言語の拡張を記号論的方法によって解明することにある。非言語的記号に関わる作家と作品、言語記号に関わる研究者と理論の関係は、解釈者(創作者)と記号と意味対象の記号過程として扱うことができる。ただし、上記の問題は、カルナップの「理論的存在者の受容可能性の問題」、モリスの「美学と記号理論」で扱っていることとは異なる。

このことを2つの方法で試みる。

I. 語用論は解釈者という認識主体から始まるが、永井の語用論の検証概念においても“認識”概念が用いられている。語用論では記号過程を次のようにとらえる。(記号) 解釈者は記号を理解(認識)し、さらにその記号の解釈規則(指示規則)によって、指示対象としての意味を理解(認識)する。この過程は、解釈者から記号に向かい、さらに記号から対象に向かうという有向方向をもっている。この過程を「解釈過程」ということにする。

解釈過程: 解釈者 → 記号 → 対象

モリスの記号論では、たんに、表現関係、指示関係と述べているだけで、有向性を持つとはいっていない。この解釈過程において、解釈者はたんに言語的確認をするだけで、新たな認識内容を増やさないというわけではない。既知の言語とその指示規則から複雑に構造化された言語(構文論的構造)により、未知の可能的事態を解釈者は認識する。すなわ

ち、指示的意味が与えられ、解釈者にとって認識内容が増大するといえる。このことは、学習的認識量の増大ともいえる。この指示対象は“真理対応説”により言語内的に客観的存在者である。なぜならば、この対象に関するいかなる記述に対しても真偽が問えるからである。このことは、多くの言語哲学者、分析哲学者でさえも十分に理解しているとはいえない。

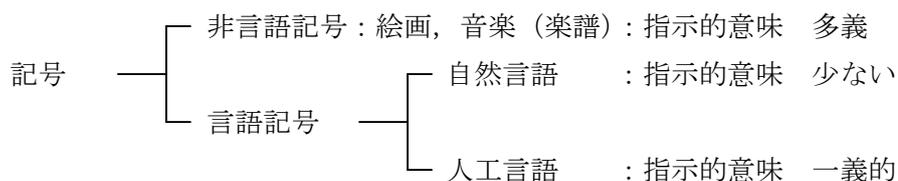
この解釈過程に対して、解釈者が“漠然とした認識内容”をより明確な認識とするために既存の言語的枠組と関連させて“記号化”する過程を“認識過程”という。ここでいうより明確な認識とは記号的認識の意味である。一方、この漠然とした認識内容はまだ記号化されていない、ゆえに、記号の指示的意味としての“対象”とは異なる。言語化される以前の“認識内容”を“直感的認識”と区別して“イマーゴ（imago）像”という。なぜならば、“直感的認識”は非言語記号としてすでに記号化されたものとして扱われる場合があるからである。永井は「認識論における“直感知”は言語分析の範囲は越えるが、非言語記号としての記号論の範囲であり純粹記号論である。」と述べている。(8)

“イマーゴ”の存在的身分は解釈者と同等であり、ある意味では解釈者そのものである。解釈者を対象化して、解釈者とイマーゴに分離したのは、イマーゴの一側面を抽出し（解釈規則を与え）新しい記号を意味と共に導入するためである。

認識過程： 解釈者 ⇒ イマーゴ ⇒ 記号

さきの解釈過程は学習的過程としたのに対し、この認識過程は創造的過程ともいえる。漠然とした意識内容のままでは記号化が不可能である。従って、記号化を行うときも、創造者としての解釈者の持つイマーゴの一側面が記号化されるに過ぎない。記号化されると同時に、指示規則が与えられなければならない。これによって、新しい記号の導入が可能となり、拡張された言語の解釈過程となる。ただし、非言語記号と言語記号、また、言語記号でも自然言語と人工言語では、指示規則が明示的か非明示的かの相違がある。

この記号化は2つまたは3つに分けてみる必要がある。



このことは非言語記号（例：芸術作品）を言語記号（日常言語）で説明する根拠を与える。また、作家の指示的意味（主観的側面も含めれば表現的意味）と鑑賞者の指示的意味（表現的意味）の“ずれ”が生ずる根拠も同じである。

解釈者のイマーゴ（主観的）の認識的一側面を指示規則化することによって導入された記号とその指示対象としての意味が、既存の言語枠に初めて導入される。その際、記号の意味は、解釈者の意図に適切であるかどうかという判断によってたえず修正される。

解釈者に依存するイマーゴを出発点として拡張された言語が私的言語か否かは、語用論的解釈の意味基準、さらに経験的解釈の意味基準によって決まる。

解釈者 記号 対象（意味）
（認識主体）

（イマーゴ関係）

イマーゴ （新しく導入）対象
（客体） 一側面

主客未分化の解釈者を対象化（意識化）することによって、認識主体（解釈者）とイマーゴに相対的に分離する。

II. 解釈者が何らかの認識をしているとき、その認識内容はすでに記号的認識である。言い換えると、解釈者は対象（記号的意味）について何らかの認識をしているかぎり、そのレベルの言語を持つと考えられる。それゆえに、認識のレベル、すなわち、解釈者のレベルと言語のレベルは対応している。語られる言語を対象言語といい、語る言語をメタ言語という。さらに、メタ言語について語る言語はメタメタ言語である。このように言語は階層構造を持つ。この区別を厳密にしなければ、矛盾が生じてしまう。

解釈者が何かを言語化しようとする認識過程は対象レベルの言語化であり、それゆえに、対象言語への新たな記号の導入と同時に意味としての対象も導入される。他方、認識過程に現れる“解釈者”と“対象”について語る認識言語は、メタレベルのそれである。いいかえると、認識過程とは、メタ言語で語られる事態を対象言語で語りえるように、対象言語の拡張をすることである。たとえば、対象言語として“物理言語”を用いる。その説明として、日常言語としての“物言語”を用いるとすれば、この言語がメタ言語である。このとき、メタ言語において、ある日常言語の“長さ”の部分的解釈として、物理的“長さ”の概念が一連の測定手続きを述べることによって、対象言語である物理言語の枠組に新しく導入される。

モリスの記号論においては、表現関係（解釈者—記号）と指示関係（記号—意味）によって、語用論と意味論を厳密に区別することが可能である。しかし、認識行為を記号論的に分析するには、認識主体を一方向的に記号（概念）として捉えるだけでは不十分である。自己の認識内容（对象的認識）を対自化する反省的認識、記号論的にいえばメタ的認識として階層化して構造的に捉えなければならない。すなわち、認識主体である解釈者、記号、意味の関係を階層構造的に捉える必要がある。また、認識主体としての解釈者の記号に向かわせる一面の働きとしての模写的契機だけでなく、主観的である構成的契機のメタ的（反省的）認識内容と記号化に向かわせる側面も、解釈者と記号の間に存在するのである。

文献

- (1) C.W.Morris Foundations of the Theory of Signs,
Foundations of the Unity of Science vol.1, University of Chicago Press, 1938
- (2) G.Frege Uber Sinn und Bedeutung,

Zeitschr. für Philos. und Philos. Kritik, 100, 1892

- (3) A. Tarski Wahrheitsbegriff in den formalisierten Sprachen,
Studia philosophica I, 1933
- (4) R. Carnap *Intoroduction to Semantics*, Cambridge, Mass, 1942
- (5) 永井成男 (共著 和田和行) 『記号論』 北樹出版, 1989
- (6) 永井成男 (共著 和田和行) 『哲学的論理学』 北樹出版, 1997
- (7) 永井成男 「ハイデッガー存在論に対する言語分析的アプローチの可能性について」
東洋大学 短期大学 紀要第四号, 1973
- (8) 永井成男 『哲学的認識の論理』 早稲田大学出版部, 1974

(元日本大学教授)